

---

# **連想世界は夢幻想**

鈴乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

連想世界は夢幻想

### 【Zコード】

N6097A

### 【作者名】

鈴乃

### 【あらすじ】

『現実の中で起きた夢』の、番外編！今回の主役はケイスケだー。「どけどけ、主人公。お前は脇役。俺がヒーロー」ケイスケのちょっと真面目な昔話と現在が交差する。

『地獄とか天国つてあると思いますか?』

あなたは例えば誰かにこう聞かれたらどんな風に答えるだらうか?  
自分は、答えるときは多分こうだと思つ。

『あつても、いいとは思ひますよ』

あつても、いいとは思う。

ただソレが自分達にとつてどうこうものであるうとも。  
存在するだけなら、俺には関係のないことだから。

+ + +

駅前。

いつもの学校の帰り道。ふらふらとあても無く歩く、日常。  
カズマと別れて（本当はもっと彼と遊びたかったのだが、彼の強引  
な却下で残念ながらダメになつた）、暇を持て余しているとき、不  
意に俺は声をかけられた。

「あの・・・」

最初は誰か別のヤツが声をかけられたのだと思つてすっぱり無視し  
ていた。

そんなことより、暇つぶしだ。と、思つていたので取り敢えず目に  
付いた自動販売機に向かつて歩みを進めた。

ガシャンッ

自動販売機で水を買つて、取り出そつとする時だつた。

「あの・・・っ！」

さつき聞いた声が、今度はちょっと切羽詰つた感じで俺に声をかけ  
てきた。

どうして、自分自身に声をかけられたか分かったかと言えば、自動販売機のボトルの取り出し口に伸ばそうとした、中途半端な位置で止まっている腕を見れば分かつただろう。

「・・・はい？」

俺は、つかまれた腕を、まず最初にみて次に顔を上げた。

「・・・君、誰かな？」

極力愛想のいい声で言つてみる。

相手は人目で年下だと分かる、小学生高学年か・・・中学生になつたばかりぐらいの少年だつた。

もの凄く、困つたような怖がつてゐるような。とにかく、凄みをかけたら今にも慌てて腕から手を離して謝り出しそうな雰囲気をもつていたので、それはやめておいた。これ以上話をこじらせて水が取れなくとも困るし。

「あの・・・地獄とか天国つてあると思いますか？」

少年は俺の言葉を無視して言つた。

どうやら自分が何者かを答える気はさらさらないらしい。

「・・・あつても、いいとは思つけど?」

関係ないよ、今の俺には。

そう言いたかつたが言葉を飲み込み、必要最低限のことだけ答える。少し、少年に興味を抱いてくる自分も一緒に押し込んだ。

「地獄と天国」先に例を出す方が地獄とは。普通は天国に希望をもつものだから、「天国か、地獄」というものじゃないのか？

・・・いや、俺には関係ないことが。

一瞬の逡巡を隠すように小さく頭を振つて、俺は少年に続けて言った。

「どうして、俺にそんなこと聞くの？」

「知つてそつだつたから」

即答された。

言葉に詰まる。だが、こんなガキ」ときに見透かされたくは無かつたので、俺はしらをきりとおすことにした。

「知つてそう?」

「うん。だって、あなたは見たことあるし」

「・・・へえ?」

ヤバイやばいやバイ。確実に俺の顔は無意識のうちに見えていた。

見たことアル。

つまりは俺の秘密を知つてこる。いつもひとつと考へてほほ間違いないだろう。

黙らせなければ。多分武力じゃここは黙りそうとも無い。まあ、あつちを見ている時点ではそれは皆無だ。

じゃあ、どうすれば・・・

「考え込まないで下せー」

そこまで考えたとき、俺は少年に思考を遮られた。

「・・・あ?」

情けない声しかでないもんだ、こいつって。

馬鹿みたいにうろたえた直後の声ほど氣の抜けたものはない。

「考え込んで欲しくて話しかけたんじゃないんです」

「じゃ、どうしたって言つておけば、君の役には立てないと思つよ?」

そこまで凄いヤシジヤないし、俺。

せいぜい進んだ年数だつて、今八年・・・やつだ。ロイシは一つなんだろう?

あつちを見てこるのは見掛けの年齢をはるかに超えてこるのはずだ。

「歳、聞きたいみたいだね」

「またか。お前は人の考へてることを読む能力でもあるのか?」

「まさかー?僕は平凡な小学6年生ですよ?」

「実年齢は?」

「・・・24歳です」

「そこまでつ?!!」

なんてこつた。「イツ年齢が俺と同じぐらいじゃないか？！」

「小学生のおちゃめなおつさん・・・」

「からかわないでくださいよ。好きになつたわけじゃありません」

・・・正論。

「あー・・・その、なんだ？君も神隠しに？」

「ええ。だから、僕と同じ感覚の人を捜してました」

+ + +

神隠し。

それが俺の秘密であり、現在の予定だ。

俺は、高校1年のとき、神隠しにあつた。世間ではなく、行方不明とか、蒸発とかいう。

ただの失踪とはワケが違う。俺は呼ばれたのだ。あっちの世界に。あっちの世界。

それがどんな所かと説明することはできない。だから俺は「あっちの世界」と呼んでいる。

そこで、呼ばれた理由を果たして戻ってきたのだが。  
神隠しには副作用がある。

・世界の特殊影響の関与が一切無視されること。

・ランダムな年代設定と人格チェンジ。

まあ、どういうことかって言えば、行方不明になつた人物が数年後にひょっこり出てきても不自然だしあつちとしても都合が悪いから、ランダムに年代設定をつけて浦島太郎っぽく自分の生きていた時間・場所・環境をずらしてしまうのだ。

そして、同じ人間。つまり呼ばれる人間と呼び終わった人間を入れ替える。

失踪したときの場所や位置には戻れないから、これから呼び出されるヤツと俺との人格チェンジみたいなモン。まあ、簡単に言えば力ズマの能力みたいな作用が起きるわけだ。じゃないと世界の人口は

不自然な増減を繰り返すことになつてしまつらしい。

あっちの世界をどう表現するかは、人それぞれだし、俺みたいな頭も微妙なヤツに表現しろと言うほつが無理がある。

あれは、ただの闇が延々と続いているかのような空間。 そうとしか表現できない。

それはいいとして、あっちの世界に關つたやつは必ずこのペナルティを受けられる。

それが、『世界の特殊影響の関との一切無視』。これこそ、本来の意味での副作用だ。

世界とは、俺が今いるこの現実世界のことらしい。

あっちの世界では、俺のように現実世界にいる、「じぐじく平凡で様々な影響に干渉され易いヒト」を求めている。

何にでも、染まりやすい。絵の具で書く白のよひ、「様々な色に溶け合ひ、混ざり合つことが出来る。

だけど、あっちの世界にいつてしまつた俺は白ではもうない。あっちの世界の色を多少含んだ、白として生きていくことになる。

あっちの世界は、俺達みたいな白は「使い捨て」である。

白を混ぜることに意味があつて、既に完成した絵の具には興味がない。

だから、また、白に戻つたりこの現実世界の色と混ざり合つた複雑な白にならないように、様々な世界の影響一切を反射する論理を体の中に組み立てあげられた。

早い話、俺がカズマと常に一緒にいられるのも、そういう意味では楽なのだが、本人は気になつて仕方がないらしい。

まあ、23の俺も今じゃ若返つて高校生として楽しくやつてる。神隠しなんて過去の話で、ほとんど日常生活には関つてこない。本当は「全然」と言いたいところなのだが、少年みたいなヤツに出会つた時点でそうは言えないだろう。

これは、ただただ過去の話なのに。

+ + +

「しかし、何故君は死んだ後のことを考える？」

俺と少年は自動販売機の隣に備え付けてあるベンチに腰掛けて話していた。

やつと開放された腕で水を取ったとき、いつもよりちょっとぬるめなことに舌打ちをしたかったが、それはそれで大人気ないかと思いつみどどまつた。

ついでに、少年には嫌味のひとつでオレンジジュースを奢つてやつた。

中身、24歳の青年は小学生らしい笑顔を懸命に作ろうとして、口元だけ引きつった笑いを浮かべて礼を言った。

「いけないことでしょうか？」

「いやー・・・いけなくはないんだけどさ。どうしてかなあって。どうせ俺達神隠しにあつたヤツは世界の関心を一切反射している。あつたとしても、そこには行けねーんじやね？」

「そうかもしませんね。でも、それは仮にあつたとしたら、でしょう？」

「・・・何か別な所に話の要点がありそうだな。だつたらさつさと言えや、俺これからカズマの家に突撃訪問しに行くんだから」

「そのカズマさんというあなたの友人の日常を守れたなんて。僕はちょっとお手柄かもしませんね」

軽く少年は笑いながら話をやつと本題に移していく。

「連想・・・という言葉をご存知でしょうか？」

「・・・バカにしてるのか？」

「いえ・・・話が一気に簡単になるかと思ったのですけど・・・すみません、説明は上手くなくて」

少年があまりにも、申し訳なさそうな表情をつくるものだから俺も慌てて上を向いて口差しに顔をしかめながら考え込んだ。

「連想・・・ねえ。一つの事柄があるとする。それを感知した瞬間

に、無意識的に関連したほかの事柄を頭に思い浮かべる・・・ま、こんなところか？」

「見本的考え方ですね。大体あつてると思います。・・・この世の中はまさに連想世界なのだと思います。過去に誰かがなにか画期的な発明や発見。とにかく今まで誰もやったことの無いようなことをしたとします。そうすれば、周囲の人は、じゃあ次はこれ、その次は・・・と言つた風にイメージを連想させていき、いまの生活があり、私達は生きているのだと思います」

「まあ、どちらかと言えば日常の言動自体連想と化してゐるよ'うなものだしな」

俺が納得すると、少年は一瞬安心した顔をして、すっと、真剣な表情に切り替えた。

「でも、忘れられるときもあります」

「・・・あ？」

「様々な人たちがこの世界で生きて連想して、死んでいく。連想した結果は残つてゐるのにどうして、彼らの存在は残らないのでしょうか？」

「多すぎるから人間のメモリの許容範囲を通り越してるからじゃねーの？」

さらりとこたえる俺の顔を少年は苦笑交じりに見ながらそうですね、と応答した。

「・・・彼らは一体死んだ後どこへ行くのでしょうか？」

「あの世・・・かなあ？」

「あの世って何だと思います？地獄も天国も、もともと人間をモチーフに考えられた、いわばイメージや連想の形であり、完成系です。様々な人がいるから、様々な形のあの世がある。それはそれでいいとは思います。でも、結局は・・・」

「結局は、あの世なんて本当に存在するのだろうか？ってこと？」

「極論は違いますけど、言いたいことはそんな感じです。第一、生きることにそこまでの素晴らしいを見出す価値はどうにあるのでし

ようか？地獄や、天国。・・・私達は死んでしまうことにどれほど  
の恐怖をいだき、またそれは本当に正しい感情なのでしょうか？」

「・・・さあなー？」

「人間は生まれてくるとき、泣きながら生まれてきます。元々人間  
にあるのは悲しみや苦しさ。幸せは周囲の後付にすぎず、環境の真  
似をして私達は笑つたり、幸せになつたりしています」

「随分と負の考え方だな」

## カコンツ

飲み終わった水の商品パッケージが張り付いたボトルを金網の「ゴミ  
箱に投げ入れながら俺は端的に感想を言つ。

少年は、まだ少しオレンジジュースが残っていたらしく慌てて飲み  
干し同じように缶を「ゴミ箱に投げ入れた。

「そう聞こえるかもりせませんけど、実際そうでしょうか？」

「ま、反論はしないわ」

「どうも。・・・本当はこの現実世界 자체が地獄であり天国である  
と思うのです。それほどまでに、この世界はその要素を十分すぎる  
ほど含みすぎている」

「まあ、あの世という考え方の原点自体、俺達人間が考えたんだか  
らそーだろうよ」

「では、本当の意味での現実世界ってどこだと思います？」

「ここがあの世だと基準を置き換えやがったな・・・」

今度こそ俺は舌打ちをした。

なんとなく少年のいいたいことが、分かつたような気がした。

「現実世界が、あっちの世界だと。君はそう言いたいわけか？」

「そうです。あっちはやけにこっちの世界に詳しく、まるで管理し  
ているようだった・・・。もしかしたら本当に意味で、あっちが現  
実世界なのではないでしょうか・・・？」

「…………」

長い、沈黙が少年が話を締めくくつた。  
俺にはなんとも言えなかつた。

いい様が無かつた、と言つても間違いではない。  
「……話はそれだけか？」

「あ・・・はい。なんの結論もオチもなくてすみません  
溜息をつく。やつぱり、俺に答えを言わせたいらしい。  
俺は立ち上がつた。なんの迷いもなく。

「あつ・・・」

斜め後ろで少年が慌てたような声を上げたが訂正もせず、おれは前  
を向いたまま喋つた。

少年の顔を見る必要はないと思つたからだ。

「どうでもいいよ、そんなこと」

「え・・・？」

「どうでもいいんだよ。あっちの世界のことなんて俺達には過去の  
話じやねーかよ。君が、あっちの世界に未練があるのか、はたまた  
トライアマでもあるのか。それは俺の知つたこつちやないし、知りた  
くもない」

他の人が聞けば、鰐膠も無い言葉だつたかもしれない。

けど、俺はもうあつちとは関りなくなつた。

こつちのほうがずっと俺は気に入つていた。

ただ、自分の立ち位置を氣に入つてゐる。それで、十分だ。

「ただ、今口に生きてるだけじゃん。その何が不満なの？生ま  
れてくることは、手前が望んだことじやないとでもいいわけ？  
だったら他の人に言えよ。ほら、カウンセラーとか、マジで親身に  
対応してくれると思つ」

だから・・・

俺は、冷たい言葉を散々少年に浴びせていると自覚はしていた。  
でも、そうでもしないと、怖くて仕方が無かつた。

また、あっちの世界に呼ばれたときのよう、自分の居場所を取り上げられてしまつのではないかと思つて。

「・・・だから、さ。死んだ後とか、連想がどうだとか。そんな小難しいこと考えるなよ。いいじゃん、今考えたつてどうしようもないし。第一死ねば分かることじやん。誰だつて遅かれ早かれ死は平等に来るもんだし。んなに、焦つて答えだそつとしなくてもいーんじやねーの?」

「・・・怖くは無いのですか?」

「怖い?」

「自分のあるべき姿ではなく、周囲の環境も唐突に変わつてしまつ。そんな中でもただただ生きていくだけ。それはあなたにとつて怖くは無いのですか?自分が自分でなくなつてしまつよつな・・・」

「ああ。

俺は納得した。

納得ついでに、仕方だ無いから少年の望みどおりの答えを返してやろうと思つた。

サービスとして。覚えておけ、少年。俺からサービスを受けるなんざ、俺が田をつけた女の子をナンパするときぐりいレア・・・まあ、野郎にとつてはレアなんだからな。

「自分という存在を認識しているうちは俺は俺だよ。形・環境がかわつて壊れるほどやわじやねーし、そんなんだったらとつぐに俺は自分自身を見失つてるよ。それに、俺は今の環境に十分満足してるんだし」「

「そう・・・ですか」

どこか気の抜けた感じの声で少年は応えた。

「私は・・・何を悩んでたのでしょうかね」

「しらね」

素つ氣無く答えて俺は伸びをした。

「うーつし。話は終わりだな?じや、俺は氣を取り直してカズマのところに・・・」「

「もうですね、行きましたかー」

「・・・・・なあつ？！」

ふと見ると、いつの間に立ち上がったのか。

少年が俺の隣で満面の笑みで、こちらを見ていた。

「極めてうなので」

そういうところだけは小学生らしい。口ぶりまでまるで、大人のよ

「ん……まあ、そだな。面倒をうだし。おつナ、許可!!」

カズマの「ことだからきつとおかしな反応で俺達を楽しませてくれる

九  
三

に愉快だ。

行くた

やっぱこっちの方がいい。

「おまでいいと、思つたから。」

(後書き)

ういーーー・久々の新作小説です。

最近はちょっと体に異常を起こして危うく入院の危機にまで追い込まれいやあ、逃げるのが大変でした。

・・・とこう経緯を話しつつ、お久し振りです、読者の皆様。始めての方はどうぞよろしくーーー！

今回はあらすじにも、書きましたが『現実の中で起きた夢』の番外編です。本当は2作目の現／夢も製作中なのですが、話の都合上こつちがさきにててきました。連載より短編の方が意外と話まとめやすいし・・・（ほそり）

カズマがいない分、ケイスケの暴走ぶりがはっきり分かりそうで分からない微妙なラインを走るうとなんとか頑張つてみてます！いや、あんまり暴走させても、ほら相方いないと寂しいモンでしょ。（ただうるさいナーと思つて大人しくさせたのですけどねw）

そんなわけで、長々と毎度のコトながら後書きを書いてるけど、読者さんは頑張つて読んでくれているんだろうな・・・。本当に、有り難うございますっ！…そして、これからもどうか宜しくお願ひします！…

それではそれでは。

ご意見・ご感想・誤字脱字等の指摘・叱咤激励等々ありましたら、評価もしくはコメントのところに送つてやってください。宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6097a/>

---

連想世界は夢幻想

2011年1月1日11時25分発行